

平成 27 年度厚生労働科学研究補助金難治性疾患等政策研究事業
難治性炎症性腸管障害に関する調査研究
分担研究報告書

—外科系プロジェクト研究の現状と方針—

研究分担者 杉田昭 横浜市立市民病院炎症性腸疾患センター センター長

研究要旨

潰瘍性大腸炎、Crohn 病に対する外科治療の適応、手術術式および術後管理の工夫、予後を検討するため、現在、多施設共同による各種の外科プロジェクト研究を行っている。潰瘍性大腸炎に対しては 周術期の血栓、塞栓合併の実態と予防、術後の消化管出血例の分析、 pouch 機能の検討（短期 長期、failure の検討）、小児例に対する手術適応、手術術式、術後分析の検討、大腸癌合併例の病理学的検討（癌サーベイランスプログラムの確立プロジェクト） Crohn 病に対しては 腸切除例に対する抗 TNF α 製剤の再発予防効果の検討 - RCT -、本症に合併する直腸肛門管癌に対して作成した診断指針と癌 surveillance program の有用性の検証、肛門病変に対する治療と重症度分類の検討、初回腸切除または狭窄形成術後の再発危険因子の検討 - prospective study -、術後吻合部潰瘍の評価（再発の評価）を施行している。

潰瘍性大腸炎に対する は症例集積を終了して解析中、 は症例の集積の中間解析を行い、 は症例集積中、Crohn 病に対する は症例集積を終了して、最終結果の解析中、 は症例集積の増加により有用性の検証を施行中、 はアンケートにより意見を集約中、 は protocol 作成が終了、 は症例集積の開始を予定している。

そのほか、潰瘍性大腸炎、Crohn 病治療指針改訂プロジェクト（責任者：中村志郎先生）で潰瘍性大腸炎、Crohn 病外科治療指針改訂案を本研究班参加外科施設で作成し、本プロジェクトに提出した。

共同研究者

福島浩平（東北大学分子病態外科）
渡邊聡明（東京大学大腸肛門外科）
池内浩基（兵庫医科大学炎症性腸疾患講座外科部門）
二見喜太郎（福岡大学筑紫病院外科）
舟山裕士（仙台赤十字病院外科）
根津理一郎（西宮市立中央病院外科）
藤井久男（奈良県立医科大学中央内視鏡、
超音波部）
板橋道朗（東京女子医科大学第 2 外科）
小金井一隆（横浜市民病院炎症性腸疾患科）
篠崎大（東京医科学研究所腫瘍外科）
亀山仁史（新潟大学消化器、一般外科）

A. 研究目的

潰瘍性大腸炎、Crohn 病に対する外科治療の適応、手術術式および術後管理の工夫、予後を検討して外科治療の位置づけを明らかにしていくためには多施設共同研究によるプロジェクト研究が必要である。

B. 研究方法

本研究班では外科プロジェクト研究として潰瘍性大腸炎に対しては 周術期の血栓、塞栓合併の実態と予防、術後の消化管出血例の分析、 pouch 機能の検討、小児例に対する手術適応、手術術式、術後分析の検討、大腸癌合併例の病理学的検討（癌サーベイランスプログラムの確立プロジェクト） Crohn 病に対しては 腸切除例に

対する抗 TNF α 製剤の再発予防効果の検討 - RCT - 、本症に合併する直腸肛門管癌に対して作成した診断指針と癌 surveillance program の有用性の検証、肛門病変に対する治療と重症度分類の検討、初回腸切除または狭窄形成術後の再発危険因子の検討 - prospective study - 、術後吻合部潰瘍の評価（再発の評価）を選択し、現在、アンケート調査の施行、または解析中である。

（倫理面への配慮）

参加施設の症例を匿名化して結果を集積、分析することとしている。

C. 研究成果

1. 潰瘍性大腸炎

周術期血栓、塞栓合併は高頻度であることが報告され、術後消化管出血例では症例集積を終了して分析中、pouch 機能の検討（短期 長期、failure の検討）、小児例に対する手術適応、手術術式、術後分析の検討では症例集積と中間解析を行い、大腸癌合併例の病理学的検討（癌サーベイランスプログラムの確立プロジェクト）は症例集積中である。

2. Crohn 病、

腸切除例に対する抗 TNF α 製剤の再発予防効果の検討 - RCT - は症例集積を終了して解析中、本症に合併する直腸肛門管癌に対して作成した診断指針と癌 surveillance program の有用性の検証は症例集積を増やして施行中で、現在、高頻度で癌が発見されている。肛門病変に対する治療と重症度分類の検討ではアンケートにより意見を集約中、初回腸切除または狭窄形成術後の再発危険因子の検討 - prospective study - は protocol 作成が終了、術後吻合部潰瘍の評価（再発の評価）症例集積の開始を予定している。

3. 潰瘍性大腸炎、Crohn 病外科治療指針改訂案作成：潰瘍性大腸炎、Crohn 病治療指針改訂プロジェクト（責任者：中村志郎先生）で両疾患の外科治療指針改訂案を本研究班参加外科施設で作成し、本プロジェクトに提出した。

D. 考察

潰瘍性大腸炎、Crohn 病に対する外科治療の位置づけは各種の retrospective, prospective な研究により明らかにしていく必要がある。

E. 結論

潰瘍性大腸炎、Crohn 病に対する外科治療の位置づけは内科治療、外科治療の変遷によって変化しており、各種のプロジェクト研究によってより適切な位置に立つことが患者の QOL 改善に有用と考えられる。

F. 健康機関情報

特になし

G. 研究発表

今後予定

H. 知的財産権の出願、登録状況

特になし